

2009.10.28 第1回電磁界フォーラム（大阪）

～電磁界問題の過去・現在を知り、未来を考えよう～ の記録

日時：平成21年10月28日（水） 13：00～16：30

場所：大阪市天王寺区上本町8-2-6
大阪国際交流センター 小ホール

プログラム：

13:00－13:05 開会挨拶 電磁界情報センター 事務局

13:05－13:45 電磁界問題に関する歴史
電磁界情報センター 世森 啓之

13:45－14:15 電磁波問題市民研究会の歴史
電磁波問題市民研究会事務局長 大久保 貞利氏

14:15－14:45 市民の電磁界のリスク認知とその歴史
電力中央研究所 主任研究員 小杉 素子氏

14:45－15:05 休憩

15:05－16:25 パネルディスカッション
ファシリテーター 電磁界情報センター 倉成 祐幸

16:25－16:30 閉会挨拶 電磁界情報センター 事務局

講演の内容：（発表スライド参照）

- （1）電磁界問題に関する歴史
／電磁界情報センター 世森 啓之
- （2）電磁波問題市民研究会の歴史
／電磁波問題市民研究会事務局長 大久保 貞利氏
- （3）市民の電磁界のリスク認知とその歴史
／電力中央研究所 主任研究員 小杉 素子氏

パネルディスカッションの内容：

【ファシリテーター】倉成 祐幸

【パネリスト】大久保 貞利氏、小杉 素子氏、世森 啓之

(順不同、敬称略)

【討 論 内 容】

(ファシリテーター) 電磁界情報センターの倉成と申します。先ほど、話がありましたとおり、金川先生が急遽、ご都合で参加できないということですので、力足らずではございますが、私が進行させていただきたいと思います。よろしくお願いします。

今回の電磁界フォーラムのテーマは、「電磁界問題の過去・現在を知り、未来を考えよう」というテーマです。今まで3名の、私どもの職員および専門家の方から電磁界問題の過去の話を受講いただきました。これからは、「電磁界問題の現在」と「未来」とを考えていきたいと思っています。

まずは、「現在、電磁界はどうか」ということです。本日もたくさんの方に来ていただいております。いろいろな立場の方がこの電磁界問題を今どのように捉えているのか、皆さん、共通認識をお持ちなのだろうか、あるいは認識にギャップがあるとしたらそれはどこにあるだろうか、というところを発見したいと思っています。

また、もし可能であれば、「電磁界問題の未来」として、そのギャップを埋めるために各立場の方々がどのようにこの問題に取り組んでいけばいいだろうかということを皆さんと話し合いをしていきたいと思っています。決して、いろいろな立場の方の認識が間違いだとか、こっちが正しいということをここで結論付けようということではありません。どこに認識の違う点があるのだろうかということをここで確認し合ひましょう、ということを趣旨にしたいと思っています。会場の方々にもぜひ参加していただきたいと思いますので、よろしくお願いします。

これから、ディスカッションに入りますが、携帯電話をお持ちの方は、ぜひ電源をオフにさせていただきますよう、ご協力、よろしくお願いします。

まず最初に、私なりにどのようなことを議論しようかと考えているところがあって、4つ考えております。

1つ目として、「電磁界のリスクをどのように理解されていますか」という問題をまず考えたいと思います。

おそらくリスク評価結果について、私はこう思う、いやいや私はこう思うという話が出てくるとしますので、「その違いがどういうところから来ているのだろうか」ということを2点目として話しさせていただきたいと思っています。

3点目として、電磁界問題そのものもあるのですが、例えば行政ですとか企業、こういう立場の方々に対して、「市民はどんなところを不満に思っているのだろうか」、こういうこともできれば話し合ってみたいと思っています。

その後、4つ目、ここまで辿り着きたいと思っているのですが、産業界や行政あるいは一般の市民、それから市民団体あるいは私ども電磁界情報センターは、こういったことを受けて、「今後どのような点に気をつけ、取り組んでいったらいいのか」ということを話できればと思っています。

まず1つ目として「電磁界のリスクをどのように理解されていますか」という話から入っていきたいと思います。会場の皆さまにも参加していただきたいと思います。まず、パネリストの皆さまから話をいただいた後、会場の皆さまにも是非発言していただきたいと思いますので、私ならこう思う、という考えをまとめておいていただければと思います。組織の代表として発言するのは難しいという方もいらっしゃると思いますが、そのときには「個人的に思います」ということでも結構ですので、ご参加いただければと思います。

まず、大久保さんから話をお聞きしたいと思います。ご講演の中でも、「電磁界のリスクについては、今、灰色段階だ」と話されていましたが、この灰色にもたくさんあって、黒に近い灰色か、あるいは白に近い灰色か、ご講演の中で言われた「灰色の段階」というのはどこに向かっての灰色か、ということについて、少しお考えをお聞かせいただければと思います。

〔電磁界のリスクをどのように理解しているか〕

（大久保 貞利氏）ご指名を受けましたので発言させていただきます。はじめに、私は「電磁界」と言わず「電磁波」と表現いたします。厳密には、高周波（RF）と電磁界（EMF）に電磁波は分けて理解するのですが、WHOも「国際電磁波プロジェクト」で「EMFS」と一緒にたに表現していますので、私も「電磁波」としてこれから表現します。

電磁波の健康リスク評価としては、一つは「熱作用」があります。主に高周波領域での生体影響ですが、要するに電磁波による発熱効果です。体温を上げてしまう効果です。もう一つの効果（影響）として「刺激作用」があります。これは主に極低周波領域で出てきます。筋肉とか神経を刺激する効果です。この熱作用と刺激作用の二つの効果は、ICNIRP（国際非電離放射線防護委員会）も認めている効果で、かなり高いレベルで曝露された時に出てくる生体影響です。いわば急性影響です。この急性影響に関しては、先ほど世森さんが話したように、ほぼ国際的にコンセンサスが成立している。日本の行政も認めています。この分野については灰色ではないと思います。

いま司会から提起された「灰色」とは、熱作用や刺激作用以外の「非熱作用」というふうに言われている効果です。英語で「non-thermal effect」という。この熱でも刺激作用でもない、いわば慢性影響、つまり長期間曝露されたことでじわじわと生体を痛めつける効果が灰色なのです。国際がん研究機関（IA

RC) の評価で「2 B」とされています。この非熱作用をどう見るか、が悩ましいし、灰色なのです。

これをどう見るかについては、一つは2007年6月18日に発表されたWHOの極低周波の環境保健基準（クライテリア）で示された見解が中心になるかと思います。クライテリアは何百ページにわたる報告書ですが、その長い報告書を要約した部分が「第1章 要約」です。この第1章に「健康リスク評価」という項目があり、その項目の中でさらに「慢性影響」と記した箇所がある。慢性影響はまさに灰色ですから、WHOのクライテリアがどのように表現しているか注目すべきです。以下紹介します。

「(慢性影響について) だから、結局のところ、(小児白血病と極低周波磁場の) 因果関係を示すほど証拠は十分ではないが、懸念が残る程度には十分証拠はある」

この懸念とは「concern」という言葉で、懸念とか関心とか不安の意味です。つまり因果関係証拠は小さいが、懸念を持つには十分な証拠（エビデンス）がある、と要約しているのです。これを白に近いか、黒に近いか、といった灰色の濃淡を言っても意味がないであろう。因果関係をはっきりさせるには動物実験や細胞実験が必要ですが、つまり因果関係の証拠には疫学証拠は十分ではないが、疫学証拠は細胞実験や動物実験の証拠より優位に位置し、一つのポイントとなる。その点で、グリーンランドらのブル分析やアールボムらのブル分析によると疫学調査で3ミリガウスから4ミリガウス（0.3マイクロテスラ～0.4マイクロテスラ）で小児白血病リスクが約2倍になると出ていますし、それをWHOのクライテリアは支持しています。

ですから、こうしたリスク評価がある以上、「白に近いから軽視していい」とするのではなく、「リスクは灰色段階なのだから」リスクを負う可能性をもつ住民の意見をていねいに聞いていく必要があるだろう。これが私の意見です。

（ファシリテーター）ありがとうございました。大久保さんのご見解ですと、WHOの『環境保健クライテリア（EHC）』の中で、「しかし、懸念あるいは関心、concernを起こすには十分な証拠がある」、ここが重要だという話です。

世森さんの見解はどうでしょうか。

（世森 啓之）一般論から言うと、私も今の大久保さんの発言には同意します。ただ、個別に言うと微妙に違うところがあります。このWHOの結論で、40年間の研究の蓄積を考えたときに、その証拠を集めると、大久保さんが冒頭おっしゃった刺激作用、私のスライドの中では「電気が流れることによる」と説明し、大久保さんは「刺激効果」とおっしゃいましたが、これについての有害

性については、論を俟たずに異論のないところだと思います。しかし一方で、小児白血病に関して40年間の証拠を集めた結果として、WHOは「因果関係と認めるほど証拠は強くない」と言っています。私は、これが今の時点での科学として唯一の答えだと思います。

「安全とも言い切れない。しかし、因果関係があるとも言い切れない」、そういう意味では灰色です。ただ、大久保さんはその灰色の濃さはどうでもいいとおっしゃいましたが、私は少し意見が違って、少なくとも40年やって、いろいろな研究者が多くのお金を使って、磁界と小児白血病というテーマに特化していろいろなことが行われてきました。ここ数年、急に関心の対象となってきた環境問題あるいは公衆衛生問題で、まだほとんど研究が行われていなくて「よくわからない」というものと、40年やってきて小児白血病の原因を追い続けてきて「未だにわからない」というものでは、私は決定的に違うと思います。次回のフォーラムで解説する予定ですが、2001年、IARCでの評価の結果、磁界の発がん性に関して2Bと分類されましたが、これをどう解釈するかという意味では、私は大久保さんとは少し見解が異なっていて、同じ灰色でも、おそらく限りなく白に近い灰色ではないかと思っています。唯一、残っている1点だけがどうしても否定し切れないので、結果的に安全とは言えない、というところなのかなと思います。

先ほどのアメリカのRAPID計画の結論も紹介しましたが、「完全に安全」とは言っていません。「完全に安全とは言えない。しかし、現時点できちんとそれを制限する、例えば電磁界の発生源の使用を禁止したり、あるいは数値目標で制限したりというところまでやるほどのものでもない」という提言が、まさにそういうことかと思った次第です。

これは小杉さんに聞いたほうがいいのかもかもしれませんが、先ほど大久保さんがおっしゃった、「これをどう管理するのか」という問題に移るときに、灰色の部分の程度を確定しておく必要がないのかどうかについていろいろ考えるところがあります。

リスク管理の議論については大久保さんと同じ意見で、WHOが言っていることも事実です。「因果関係は確定できない。しかし、関心、懸念、心配を残すには十分強い。だから、WHOとしては、もっと研究をやらないといけないと考える」。関心を残す証拠が何もないければ、WHOとしては何もしないと言うでしょう。そうっていないのは、やはり大久保さんが指摘されているように、何らかの灰色というか、消し切れないところが残っているから、それに対処するためには、各国できちんと議論した上でそれなりの対策を考えたい方がいいということだと思います。この点については大久保さんに同意しますが、その議論の前提で、灰色の加減をある程度一致させていく必要があるのではないか

とも思います。その点はどうなのでしょう。

(大久保 貞利氏) そういう言い方はあまり意味がない、と思っています。敢えていうならば、私は「(電磁波リスク) は限りなく黒に近い灰色」だと思っています。そこらへんは世森さんとは全然違います。

先ほど世森さんが紹介していた『バイオイニシアチブレポート』では、いろいろ条件を付しながらも、健康を守るには「1ミリガウス」という極めて低い値が必要だと言っています。「1ミリガウス」とは「0.1マイクロテスラ」です。まさにバイオイニシアチブレポートの研究者は「限りなく黒に近い灰色」と考えているからこそ、かなり厳しい1ミリガウスという数字を挙げているのだと思います。

私は、この立場と極めて近い立場に立っています。「黒に近いのか、白に近いのか」といった濃淡を言い合うより、「灰色だからこそ」、WHOクライテリアが結論として「あまりコストがかからない程度の何らかの予防的措置、予防的アプローチを導入したほうがいいだろう」と推奨していますように、私もそうした方法が必要だと思っています。もしリスクが確定しているならば、既設の設備も含めて全部3～4ミリガウス基準で規制しろ、とすべきですが、そうすると経済的にコストが膨大にかかりすぎる。だから、そこまでの負担は強制せず、新規の施設から考えるということです。これは単純でなくナーバスな問題です。

だが、日本では疫学を優先し、「低コストで、住民を巻き込んで、一つの落とし所を考えていく」というツールがないんです。いきなり、真っ向から住民と携帯会社、住民と電力会社がぶつかってしまう。事業者側は「安全だ、安全だ」と言い切り、住民は「反対だ」ということで、お互いに信頼関係がない。これは不幸なことです。

だから、私はあまり灰色の濃淡を言い合うより、「灰色だからこそ」予防原則やあるいは慎重なる回避策が重要なんだと思います。あるいはプレコーショナルなアプローチが求められるんだと思います。

WHO内にはいろいろな意見があります。これは当たり前のことです。WHO国際電磁波プロジェクトには世界60カ国が参加しています。60カ国の中にはナイジェリアのような発展途上国も入っている。発展途上国は電化すら進んでいない。そんな国でいきなり3ミリガウスだ4ミリガウスだと言ったら、それは電力化自体をやめなさいと言っているのに等しい。それは先進国のおごりです。たとえば、地球温暖化(気候変動)防止条約で、厳しい二酸化炭素(CO₂)排出規制をEUや日本に課しても、発展途上国には課さないのと同じです。課すとしたらそれはCO₂を出し続けた先進国の傲慢さなのです。電磁波でもまったく同じことが言えます。参加国が60カ国もあれば、クライテリア

の勧告も「低位平準的な表現」になるわけです。しかし、スイスだとか先進国では、それに満足せずもう一步進めて予防原則まで踏み込んでいく。その意味で、日本は先進国なんだから、発達した国なのだから、WHOクライテリアに満足せず、さらに1歩も2歩も進めた対策をとるべきなんです。これは、いわば先進国の責務です。

(ファシリテーター) ありがとうございます。リスクの認知というか、リスクをどう評価するかを、皆さんで統一しなくても、その後の「どう対処していくか」という議論ができるのかどうかという問題提起が世森さんからあったのですが、これは4つ目に、産業界や行政が今後どのように取り組めばいいか、という話題がありますので、後で議論することとします。まず、1つ目のリスク評価というところで、科学的な部分を皆さんどういうふうに評価されていますかというところを解決してから、そちらの話にしたいと思います。

会場の皆さんに、「私はこういうふうに解釈している」とか、WHOの環境保健クライテリア(EHC)でも結構ですし、これまでの状況を見て、「私はこういうふうに電磁界のリスクを評価します」というお考えをお持ちの方がございましたら、挙手をお願いします。

(会場A) すみません、座ったままで失礼します。小杉さんが「素人は電磁波を専門家より危ないと思っていない」ということをおっしゃいましたが、私は、専門家は素人より「危ない」ということは言わないと思います。私は、2年半の間、マイクロ波を浴び続けた、人体実験をされた人間です。基地局の50m先に住んでいて、ありとあらゆる健康不良が出てきました。この間に、私はいつも「私達のところに聞き取り調査に来てください」と申し上げ続けております。今まで、基地局の電波を浴び続けていたが、基地局撤廃によって電波ばく露が止まったようなところは少ないです。私たちは、自ら非常に熱心に健康調査を行いました、本当に止まった次の日から元気になった人など、いろんな人がたくさんいます。

疫学調査といっても、24時間、人を雇ってマイクロ波を浴び続けさせるということは不可能だと思います。それは非常に人権侵害になると思いますが、私の地区の人間は2年半の間、その人体実験をされたと思っています。ですから、私たちの健康調査は完璧ではないとは思いますが、こんな状況でこんなになった、あんなになったということを聞き取ってくださると、ある意味で電磁波の危険性はわかると思います。私は、電磁界情報センターの方よりずっと電磁波が危険だということを認識しております。

先日、福島大臣(消費者・少子化担当大臣)の話を神戸で聞きました。その

際、「疑わしきものには隙間として結果が出るまでは予防の態度をとらねばならない」ということをおっしゃったのです。これはエコナの問題に関してだったのですが、それが、多分、ベストな方法であると思います。今の状態は、携帯会社は「白か黒かは定かでない」と言いながら電波を流します。そして、「総務省が安全だと言っているから、私たちはそれを信じているだけだ」ということを言います。住民がどこにも言う場がなく、置き去りにされています。私達の地区には、家の中で戸がガタガタ鳴るとか、いろいろなことをおっしゃって、出られなくなった人とか、いろんな方がいます。ありとあらゆる病気、健康不良が発生しました。そして、今、一人亡くなられた方を除くと、ほとんど全ての方が回復されています。

それで、私たちの地域のことを携帯会社は「集団催眠術にかかっているのだ」と言って、リスクを怖がってそういうふうになるのだと、よその基地局問題のところで宣伝されています。

私達の地区では、もう電波は止まっているのだから、いいと言えいいようなものですが、いろいろな方が基地局問題で相談に来られます。そうすると、やっぱりどこでもこういう現実が起きているから、動かなければいけないと思って、この会に来てもおもしろくはないのですが、仕方ないから来て、いろいろなことを言っています。

電磁界情報センターのような専門的な人が、私達の地区みたいに電波が出て、その後止まったようなところがあったら、「調べさせてください」と言うのが当たり前ではないかと思いますが、それが無いということはリスクに対してどういうふうに思っているのか、リスクコミュニケーションをやる場所としてそれでいいのかということを、本当に素人の考え方ですが、教えてほしいです。

(ファシリテーター) ありがとうございます。今の話は、リスクということに関して絞らせていただくと、自らの体験で電磁界の危険性ということを経験されたのだということですね。

(会場A) はい。

(ファシリテーター) 専門的研究に基づくリスク評価のあり方もあるでしょうし、臨床と言っているのかどうか分かりませんが、現場レベルの体験から電磁界の危険性を認識しているということだろうと思います。

その他、リスク評価に関して何かありますか。

（小杉 素子氏）貴重な話、ありがとうございます。すみません、私の説明が悪かったので、1点だけ訂正させてください。専門家のほうが電磁界について危険だと思っているというスライドの話をされましたが、あれは相対的に専門家の中では電磁波の位置があそこだというだけで、一般の人と比較して、専門家のほうが危険だと思っているというデータではないので、そこだけ、説明が下手で申しわけありません。

先ほどいただいた話の中ですごく重要だと思いましたが、一般の人々はいろいろ問題意識を持って物を言いたいのに、どこにも行き場がないのが問題で、先ほど大久保さんが言われた話とも関わるのですけれども、いろいろな人が問題に対して、それをどう受け止めて、どうやって対処していったらいいのかということ話す場が日本にはあまりないということが問題なのだなと私も思います。多分、4番の「今後どうしていくべきか」というところが議論になったときに、その話がまた出てくると思います。

（会場A）基地局の問題は個人の力で避けようがありません。勝手に建ってしまったら、主婦は一日、家を空けるということができませんから、ずっとそこにいなければいけない。他の電化製品とかいろいろなものは個人が考えて、こんなものは危ないからやめておこうとか、いろいろ対処できます。そういうことが一切できない条件の中で建ってしまうということが、私は非常に人権侵害だと思います。

だから、やっぱり、みんなが納得の上でいろいろなことができていく社会でないと、おかしいと思います。

（ファシリテーター）ありがとうございます。こういう体験をしているんだけど、専門的なところで調べてほしい、あるいは個人としては何ともできない、という話がありましたが、これは4つ目の「どうしたらいいか」ということで取り上げたいと思います。

（会場A）はい。

（ファシリテーター）それでは、リスク評価のところは、国際的に行われた1つの評価結果を読んでも、いろいろな読み方があるという話もあったかと思いますが、いやいやそういう専門的な機関の話ではなくて、現場レベルでそういう体験をして電磁波のリスクというものを認識している、こういうものも要するというご紹介もありました。リスクに関しては、いろいろなリスク評価というか、自分なりにリスク評価をされている方がいらっしゃる、あるいは1

つのものを見ても違う解釈をすることがあるという認識の違いがあるということとでまとめさせていただきたいと思います。

次に、こういった電磁波のリスクを考えてみても、いろいろ解釈が違ってくるといふ話の中で、なぜリスクの違いが出てくるのかということを経論してみたいと思います。いろいろな要因があろうかと思うのですが、先ほどのご講演を聞いて、小杉さんの話の中から議論をスタートしたいと思います。

専門家と一般の人の認識の違いの中で、情報が偏っているとか、隠されているという認識を、一般の方ばかりでなく、電力社員の中にもそう思っている人が結構いたというのはちょっとおもしろい結果だと思うのですが、情報の入手の仕方によって認識が違っているという話で、リスクの認知、ギャップが出ることについて何かコメントがあればお願いします。

〔なぜ一般の人と専門家でリスクの認識の違いが出てくるのか〕

（小杉 素子氏）情報に限らず、リスク認知に影響を与えるものはいろいろありまして、例えば基本的な知識もそうですし、科学技術をコントロールできるものであるという価値観によってもかなり影響をうけます。一般の人は「科学技術は、あまりコントロールできない。何が起るかわからないし、悪用されることもある」という傾向が強いのですが、専門家は「コントロールできる」と思っているので、そういう価値観がリスク認知に影響します。また、リスクそのものの特性によって、リスクを非常に高く感じるものとそうでないものがあるって、例えば将来世代に影響があるとか、いったん何かあるとすごく大きな被害が出るとか、あるいはなじみがないとか、目に見えないもののほうがリスクを高く感じるというのもあります。

それ以外に情報の影響もありまして、例えば信頼できる確からしいところ、あるいは専門的なことでオーソライズ（公認）されているところから出る情報はもちろん信頼できますし、それ以外に非常に身近な人と口コミでやりとりする情報の影響も非常に大きいです。口コミが非常に大きな力を持つというのは、人と「これ、怖いね」とか「危険だね」というふうに共有することで、それが非常にイヤな感じとして本人の中に起るので、それが実質的に影響すると言われています。

例えば、専門家は専門家同士で話すことが多くて、安全情報をすごく多くやりとりする。リアリティとして「とてもこれは安全な技術だ」というふうに思うというのがありますけれども、一方、一般の人は普通の生活の中で「これは安全だね」という話はあまり共有しないものなので、大体は「危険だね」とか「危ないね」とか、「これ、あまり体に良くないらしいよ」という形で、口コミで家族や友達と話をする。そういう話を一緒にしていくことによって、リアリ

ティとして「これって、どうも体に良くないらしい」というのが実感としてその人の中に起こるので、それがリスク認知に影響するということのようなことが複数の研究で示されています。

あとは、逆に、例えばベンゼンなどは発がん性があるということで、専門家の間では「結構危険なものだ」というふうに認識されているという話なんですけれども、一般の人にはあまりそういうものが流れてこないため、人と話すこともなく、一般の人にリアリティのある情報として流れてこないということもあります。そういうことに関しては、情報提供が足りていないというものもあります。情報提供の問題はいろいろあるんですが、リスク認知に関して言うならば、おそらく情報源も大事ですけれども、人々がどういう情報をやりとりしてリアリティを得るのか、ということがリスクの感じ方に非常に影響を持っているということが言えると思います。

（ファシリテーター）ありがとうございました。今の話の中で、一般の人々は「情報の確からしいところから得る」、そういうところに情報を求めるという話がありましたが、そういう意味では大久保さんのご講演で、一般市民の方が暗中模索している中、一般市民が知りたい情報をいち早く情報提供してきたという意味で、「市民団体は灯台の役割をしてきた」という話がありました。大久保さんは、正しいリスク認知を一般の方々に知らせようということでも取り組み、情報を公正に見分けし、発信していこうと考えられていると思いますが、一般の方のリスク認知を適切なものにするために何か心がけておくことなどありましたら、ご紹介いただければと思います。

（大久保 貞利氏）私は「日本人は高い教育力のある優秀な民族」だと思っています。ですから、一方的でおどろおどろしい情報を言うと、一時的には扇動させられることもあるのでしょうか、少し時間を置いて冷めてくると「あの人の言っていることは本当なのかしら」と見抜いていく力を持っています。私はこれまでに全国で百回も2百回も講演していますが、電磁波リスクについて「黒だ」と断定したことはありません。「灰色だ」と明確に言っています。正しいことを言わないと、日本人は優秀だから信用しない。住民の中には、電力会社も人もいれば携帯会社の人もしれば電機会社の人もある。研究者や専門家だっているかもしれない。自分なりに知っている情報を伝え、あとは住民の方々が判断する。そのほうが、反対運動に取り組む上で効果的で近道なんです。私も電磁波問題市民研究会はおそらくもっとも携帯電話中継基地局反対運動に大きな力を持っている市民団体だと思っていますが、そうした適切な情報提供を行っているからこそ、住民たちの信頼を得ているんだと自負しています。

だから、私はよく住民たちからチラシの書き方についてアドバイスを求められる時、「電磁波は危険だ」という書き方はやめなさい、と助言する。なにを基準に危険と断定するんですか、と。「電磁波が安全かどうかわからないからこそ、住民は不安なんだし、事前に納得のいく説明を事業者はすべきではないのですかと主張すべきなんです」とアドバイスしています。

そういうチラシのほうを受け取った住民たちは好意的に見る、とアドバイスしています。また、海外情報等を会報や本や講演やホームページで、ていねいに紹介しています。

私は、いつも講演会に呼ばれたら、1時間半講演時間をいただいています。ていねいに説明するには30分では不足です。1時間でも不十分です。1時間30分講演し、残り30分質疑応答時間を設けてください、とお願いしています。実際の質疑応答時間は30分では収まらない。質問が次々と出て1時間以上オーバーすることもよくあります。それくらい、住民たちは本当の情報に飢えているんです。

たしかに小杉さんのプレゼンテーションは「一般的な国民対象の調査」としては、すぐれたものと思います。でも、自分の住む場所で基地局が建てられるとか、変電所や送電線が建てられるとなったら、その住民たちの問題意識はガラッと変わってしまいます。住民は「一般人」でなく、「利害関係者」になってしまうんです。一般人なら「パブリック (public)」だが、それが「ステークホルダー (stakeholder) =利害関係者」になるのです。そうすると住民たちはものすごく勉強する。インターネットを駆使したり、本を読んだり、それは専門家も驚くほどです。中には英語論文まで住民たちは訳しますから。そうすると携帯会社や電力会社の言い分はずいぶんいいかげんなもので信頼おけない、と見抜かれてしまう。そのことを、もっと事業者は謙虚に知らねばならない。住民たちは事業者が考えているほど愚かではないのです。ですから、一般公衆の意識は小杉さんの調査の通りだと思いますが、現場では変わってしまう。そうしたことを含めて丁寧に対応しないと、これから5年後、10年後、大変な状況に企業は追い詰められるのでは、と私は危惧しています。

(ファシリテーター) ありがとうございます。今、電力会社へのご批判もありましたが、小杉さんの情報が偏っているとか隠されているという話の中で、電磁界情報センターも含めて、そういった面が本当にあるのかどうか。電力会社のホームページやパンフレットはいろいろな情報を出していると思うのですが、それでもなかなか信頼してもらえなくて、市民団体さんのほうが信頼されるという状況を鑑みて、企業として、あるいは我々電磁界情報センターとしても考えていかなければいけない点など何かありましたら、世森さんお願いしま

す。

（世森 啓之）まず、電磁界情報センターとしてちょっと反省しなければいけないと、今話を聞いていて思ったことがあります。私はもともと電力会社にいたので、実際にお客さんのご依頼に応じて説明に行ったり、測定に行ったりしたことがあります。先ほど大久保さんがおっしゃったとおりで、普段この電磁界問題に関心を持っていらっしゃる方は、一般の方の中では非常に少ないです。やはり、どちらかという自分の身に降りかかって、初めてこの問題を身近な問題として、「あ、どうしよう」という方が大半です。そのときに、初めていろいろな情報を欲しいと思われて、インターネットなり、お電話なりで問い合わせされるのですが、急に降りかかってきた問題に何とか対処したいと思っていらっしゃる方の欲しい情報が、果たして今の事業者や電磁界情報センターから提供できているかどうかという、実はそこを私は反省しないといけないと思っています。

現実には、電力会社でこの問題に取り組んでいたときに、現場へ行って、きちんと「電磁界というのはこういう問題ですよ」「実は電磁波と言われているけれども、電磁界というのは……」といった話から説明を始めると、「へえー、そうなの」などという話になります。先ほど小杉さんが「まず基本的な知識が入ってこないとリスク認知を高める」とおっしゃっていましたが、まさにそうかなと思います。また、電磁波は空間全体に充満していたり、あるいは送電線の下に住んでいると家の中が電磁波で包まれているという認識でいらっしゃる方が結構多いのですが、実際に測定器を持ってあちこち測ってみると、日常生活のレベルとそれほど変わらない。「見えないから怖い」ということなのでしょうが、数字で確認することで、何となく、「あ、そうなの」、と理解していただけるという状況です。

そういったことを経験することが多かったです。だからこそ、電磁界情報センターとしては、きちんと科学に基づく正しい情報を出すことに加え、やはり一般の方が初めて自分に降りかかったときに、「まず電磁界情報センターに行けば、少なくとも私が知りたい情報が得られる」という状況にしたいと私は思っています。1年間、何をしていたのだと言われるかもしれませんが、まだ実現できていなくて、そこは私の反省点かなと思います。

私から逆に市民団体さんに聞いてみたいと思っているのが、電磁過敏症の問題です。先ほどのリスク評価のところにもまた戻ってしまうのかもしれませんが、電磁界情報センターはいろいろなところで意見交換をしているのですが、先ほど会場からご発言があったとおり、電磁過敏症で苦しんでいる方が結構多いです。かなり深刻な問題になっていると思います。我々としても、今、電磁過

敏症だとおっしゃっている方がいる、この状況は何とかしたいと思っているのですが、なかなかいい答えが見つからない。我々なりに苦しんでいます。電磁過敏症という症状を訴える方がいらっしゃるのは事実で、世界各国も、WHOもそれは事実だと言っていますし、私も皆さんの話を聞いていると、「あ、確かに事実だな」と思います。ただ、WHOは一方で、「電磁過敏症と言われる方の症状と磁界にばく露されることの因果関係は確認できない」とも言っています。

情報提供する側からすると、私が個人的に市民団体さんの姿勢で少し疑問に思うのは、市民団体さんは、先ほど「おどろおどろしいことは言わない」とおっしゃいましたが、電磁過敏症という病気の因果関係は確定しているというスタンスで情報提供されているのではないかということです。そうすると逆に新たに電磁過敏症という患者さんを増やしているのではないかと私は思うのですが、市民団体さんはどうお考えですか。

電磁過敏症のような症状の方は、私は救わないといけないと思います。今、まさに悩んでいらっしゃる方がたくさんいらっしゃるので、このような状況は何とかしたいと思いますが、さらに新たな患者さんを逆につくっているような気がしてしょうがないのですが、そこはどうでしょうか。

(大久保 貞利氏) 非常に鋭いところを衝いてきましたね。電磁波過敏症に関しては、WHOの見解は、名称として「EHS」(Electromagnetic HyperSensitivity)つまり「電磁波過敏症」を採用しています。この名称採用を巡っては、2004年にチェコのプラハで行われたWHOワークショップで、意見が分かれた。一つは、電磁波と過敏症状の因果関係ははっきりしていないのだから、「IEI」(本態性環境非寛容症)と呼ぼうという意見。つまり、電磁波に限らずなにか外的因子ですぐに身体が症状反応してしまう、というのだ。もう一つの意見は、そうではなく、確かに電磁波による症状は確認されるから「EHS」つまり電磁波過敏症と名付けよう、というものだ。結局、そのワークショップでEHSに軍配が上がった。つまり「電磁波で、たしかに症状はある」とWHOは認めたのです。このことはとても意味が重い。ただし、症状は確かにあるが、どのくらいの周波数を浴びるとどのような症状が発生するのか、といった因果関係はわからない。十人十色で症状の出方は人によって違う。そこが難しいところです。

世森さんが言われたように、「市民団体が、煽ることで電磁波過敏症という患者を逆に増やしているのではないか」というご指摘ですが、むしろ、電磁波過敏症の人は、医者からも、友人からも、配偶者からも、職場からも理解されず、孤立することで逆に精神的にノイローゼに追い込まれているケースが多くある。私は東京都で働く給料取りです。ですから帰宅した午後6時以降から市民活動

をします。電磁波過敏症の人は相談相手がわからず、時として夜の11時過ぎから2時間ほども電話で相談されることもある。話を聞いているうちに相手も落ち着いてくる。本当は、医者や行政やそうした相談に乗るべきなのです。しかし医者も行政も、ましてや企業も、友人も、家族も相手にしない。そのことが彼らを追い詰め、甚だしきは自殺にまで追い込んでしまう。

まず「聞くこと」が大事です。新しい病気、現代病は過敏症に限らず医学部では教えない。だから医者もわからない。そういう新しい病気は患者から症状等を聞いていく以外ないんです。ただし、中には「これはどう考えても電磁波が原因ではないのではないか。思い違いなのではないか」というケースもあります。こういうと批判する人もいるかと思いますが、事実です。でも私の経験から言えば、訴えてくる人の8割近くは、実際に電磁波が原因で症状に苦しんでいるんです。なぜかと言えば、電源を切るとか、電磁波発生源から離れるとやがて回復するからです。すぐには治りませんよ。1週間とか10日とか電磁波発生源から離れた生活が続けると、症状が緩和されてくるのです。そういう方が何人もいます。これは思い込みでなく、電磁波過敏症なのです。

ただし、年がら年中、電磁波のせいにする人もいます。そういう場合は、むしろ「しばらく電磁波のことは考えるのは止めてください。違ったことに集中してください」とアドバイスする場合もあります。

私たちは、なにも電磁波過敏症と思う人を増やすようなことはしていません。なかでも一番私たちが困っているのは「電磁波で意図的に狙われている」と言ってくるケースです。

私は米国テキサス州ダラス市の「EHC-D」(ダラス環境医学治療センター)のウィリアム・レイ院長を訪問し、この問題で話をし、意見が一致しました。米国にも「狙われている」という人はいます。あるいは「声が聞こえる」というケースも。しかし、レイ先生も「それは間違っている」という意見です。まだ電気や通信が発明されていない18世紀から「声が聞こえる」という症状を訴える人はいたそうですから。また「狙われている」のではなく、電磁波はあちこちにあるから「狙われている」と思うだけだと。

ですから、電磁波過敏症で悩んでいる人には「電磁波発生源から離れなさい」とか「一度すべて電源を切った生活をしてみたら」とアドバイスします。冷蔵庫までブレーカー落としたら生活が大変ですから、冷蔵庫だけ別配線にし、あとはすべてブレーカー落として生活してみてください、と。それと食べ物も大事です。有機食品などなるべく化学物質が入っていない食べ物を摂るべきです。そうしたいろいろなことをアドバイスします。

「初めて私の苦しい症状を理解してくれた」と電話の向こうで泣いている人が何人もいます。なるべく苦しんでいる人の話を聞いてあげる。それは本来行

政がすべきことですが。こんなふうに私は思っています。答になっていないかもしれませんが。

（世森 啓之）ありがとうございます。個人的に、情報発信のやり方によって結果的に煽っているのではないかと思ったところがあって、少し言い過ぎたところもありました。今の大久保さんの話については、大久保さんのところにライバル意識を持つわけではないですが、我々もできたら駆け込み寺的な機能にはなりたいと思っています。

（大久保 貞利氏）難しいですよ。

（世森 啓之）そういう意味では、我々よりはるかに長い歴史を大久保さんたちのほうが持っていらっしゃるし、経験も違うので、いろいろと教わりながら、そういうことができるようになっていきたいと思っています。ありがとうございます。

（大久保 貞利氏）素晴らしいことです。

（ファシリテーター）ありがとうございました。ファシリテーターの私が発言してはいけないのですが、私も実はそう思っています。電磁界情報センターにもいろいろお問い合わせがあります。電磁波過敏症だという方からの電話もたくさんいただきます。我々も大久保さんと同じように、1時間、2時間と話をさせていただいて、我々としても現状では話を聞くくらいしかできないということなのですが、大久保さんに負けないように対応を始めておりますので、ぜひ電磁界情報センターもご活用いただければと思います。

（会場B）すみません、私、実は電磁波過敏症と思える症状で随分悩んで3年半が過ぎました。先ほど電磁波過敏症という症状名を言うことによって、新しく病気をつくるのではないかというご発言がありましたが、私自身、体験者として決してそうではなかったということを話させていただけたらと思います。

私は、家を転居した先で、自宅の近くに電力会社の小さな変電所がありました。また、職場はJRの線路のそばにありました。そこに転居して翌年から13年の間、ずっと様々な病気に悩んできました。数え上げたら、病名で言われると21ほどありました。5回、入院しました、4回手術しました。その中で、2回、がんを経験しました。そんな苦しい中で、私は電磁波が原因だということに全く気づけなかったのですが、ある家電店に入店したと同時にすごい目まいがして、それまでにもパニック障害とかメニエールとか様々言われていたのですが、そこで初めて自分の体調不良の原因が電磁波ではなかったか、と

いうことに気がつきました。

それから、大久保先生の本も読ませていただきました。幾つかの本を読んだときに、ブレーカーを落として寝ることを知って、そうした結果、初めて熟睡できました。それと電磁波過敏症ということで、ウィリアム・レイ先生の出しているらっしゃるインターネットの13項目を見て、13項目全てを発症していたので、間違いなく電磁波過敏症だということがそのときわかりました。そのことがわかったことによって、私は随分救われました。なぜなら、そこからの解決方法として、離れることとか、またこういうことに対してこうすればいいのではないかと、書籍を通して知ることができたからです。それまでは、私は自分の体質がこういう体質だから、自分は苦しんで家族にも迷惑をかけていると思っていましたが、そこから離れることによって改善されるのではないかと知ったので、徹底的にそうしました。民間療法にも通いました。残念ながら医学では、電磁波過敏症に対して診療してくださる、診てくださるところは見つかりませんでしたし、外出も無理でしたので、民間療法に通うとともに、書籍から得た知識を様々取り入れて、3年半経って、今日、こうしてこの集会に初めて出席できたのです。だから、2年前まででもきっと無理だったと思います。

そういう症状名を知ることによって、もしかしたら自分がそうだとしたらということで、回避する、その方法をとることによって改善していくことを私は一人でも多くの苦しんでいらっしゃる方に知っていただきたいと思いましたので、また、それによって救われている者もいるということを知っていただきたいと思って、途中、発言させていただきました。

〔市民はどんなところに不満をもっているのか、これからどうしていけばいいのか〕

(ファシリテーター) ありがとうございます。電磁波過敏症については、我々がこれからやっていくフォーラムのシリーズの中でもじっくり考えていきたいと思いますので、その際にまたご参加いただければと思います。

冒頭でも話ししましたが、最後に「未来を考えたい」ということです。時間が少なくなってきましたので、今までの話の中で、現在の状況というところは一応、皆さんで確認し合ったということで、「これからどうしていきましょうか」という話を残りの15分くらいでやっていきたいと思います。

4つ論点があったうち2つ終わったということですが、残っている1つはまだ現在の話で、「市民はなぜ不満か」ということと、もう1つは、これから「産業界、行政、市民、市民団体、電磁界情報センターはどんな対応をしていけばいいか」ということです。この3番目と4番目について、併せて議論してい

たいと思います。

“信頼”というキーワードに関して言うと、事業者や産業界、行政などは、なかなか信頼が得られていない。それに比べて市民団体さんについては、市民の視点に立って物事を行動しているということで非常に信頼感も高いというところがあるという現状が、今までの話の中であったかと思います。

そういう状況の中で、今後どうしていけばいいかという話をしていきたいと思います。先ほど、リスクの捉え方が違っている人間同士が、今後どうしていけばいいかということをもともと議論できるのか、という問題提起が世森さんからあったと思うのですが、小杉さん、この点についてどうお考えでしょうか。

(小杉 素子氏) 先ほど大久保さんが言われたことに私も基本的に同意です。灰色がどの程度灰色かというのは、個々の受け止める人の主観的な判断であって、科学としての結論は1つの文章あるいは数字で表されるとしても、その数字がどれくらい危険かというのは、おそらくその人の置かれた環境だとか、知識だとか、価値観といったものに非常に影響を受けて、すごく白に近いと思う人もいれば、すごく黒に近いと思う人もいます。これがどの程度灰色なのかというのを一義的に決めようというのはすごく難しい話なので、灰色は灰色だと。専門家がこの先も研究を続けてくれるということでそれは置いておいて、では、灰色だから、社会としてそのリスクを受け止めるときにどうやって扱っていったらいいかということと一緒に考えていかないといけない。

そのときには、灰色は灰色で置いておいても、このリスクを社会でどうかするためには、どういうふうな優先順位で対応していくか。お金がこれくらいの限度があるとしたら、その優先順位のどの辺までを入れるか。例えば、将来世代に焦点を当てた対策を考えていくのか、環境にも配慮していくのかというようなことを、優先順位を決めることは灰色の解釈が違っていても、おそらく議論することができると思います。「今後、どういうふうと一緒に話し合いをしていくか」という問いに対して、問題設定を灰色の部分ではなくて、「社会でどうやってリスクを管理していくか」という設定にして、いろいろな立場のいろいろな考えの人々が一緒に話し合うことが大事ではないかと思っています。

(ファシリテーター) ちょっと補足していただきたいと思います。「議論できるのではないか」という話ですが、今までの経験から、成功したことや、リスクの評価のところでこだわりすぎて失敗したことなど、何か具体的な例はありますでしょうか。

(小杉 素子氏) 大変申しわけないんですけれども、失敗例のほうが多くて、

こんなにすごくうまくいったよ、という例が、日本の事例ではあまり思い浮かびません。ただ、今まで失敗してきた原因がどこにあるかというと、基本的にリスク認知を専門家と一般の人で揃えていこう、揃えるためにはどうしたらいいかというアプローチでやってきたので、結局、リスク管理についての議論まで話がいけないというところです。この灰色は白に近いとか、黒に近いとかを議論して、ずっと平行線でいってしまって、結局、時間がたってしまって問題を悪化させる、というパターンを常に繰り返してきているという過去の例を考えると、このアプローチはあまり生産的ではありません。

どの程度の灰色かいうよりも、問題提起の視点を変えたらどうでしょうということで、この手法自体は、コンセンサスビルディングというアメリカのサスカインド先生が実際にステークホルダー（利害関係者）を集めてやるという、コンサルティングでもやっていらっしゃいますし、大学での研究としてもやっていらっしゃって、コンサルティングとしては多分成功例はあるはずなんですけれども、ちょっと不勉強でここで具体的にご紹介できなくて申しわけありません。

（ファシリテーター）わかりました。リスクの評価にこだわりすぎて議論が進まないということでの失敗例はたくさんあるという意味ですね。そういう意味では、あまりそこにこだわらずに、それよりも前に、どういうリスク管理というか、どう対応していこうかという具体的な動き、アクションのほうを議論したほうがいいのではないかと、それだったら、利害関係者、いわゆるいろいろな関係者が歩み寄れるところがあるのではないかと思います。

そういうことを受けて、リスク評価は違っていても、どうすべきかということとは議論できそうだということですので、行政や市民、産業界がどうすればいいかという話をしたいのですが、時間もなくなってきましたので、まず、産業界、行政に対して、こういうところが不足しているので、こうしてほしいという問題点と今後の要望からスタートしたいと思います。大久保さんに振りたいのですが、なければ会場に振りたいと思います。何かありましたらお願いします。

（大久保 貞利氏）3番目とセットなんですけど、行政と企業に言いたいのは、「もう少し勇気を持て」ということです。要するに、パブリック（一般人）は怖くないが、ステークホルダー（利害関係者）には怖がるんですよね。ステークホルダーを怖いというか、「敵」と見ているかんじです。これでは始まりません。住民は「普通の人」です。一生懸命勉強しているから、それは手強いですよ。ものすごくやりづらいでしょう。それでも彼らの中に入って行くんです。

たとえば、前原国交大臣は八ツ場ダム中止と言って、公共事業で食べている土建業界や自治体や地元住民たちのすさまじい抵抗にあっても、会いに行くでしょう。私からすれば「脱ダム」なんてアメリカでは常識なんですが、日本ではそうじゃない。前原大臣はボソッと「ぼこぼこに殴られる覚悟でいきます」と言っていたけれど、本当に腹を割って住民と話す覚悟がなければいけない。逃げてては始まらない。

そういった姿勢がないから、住民たちは事業者や行政を「信頼が置けない」と見抜くんです。住民は利口です。

(ファシリテーター) ありがとうございます。それでは、会場に振りたいと思います。ご意見ある方、挙手をお願いします。

(会場B) 何度もすみません。行政や、この電磁界情報センターもそうですが、そういう方はきちんと向き合って、話を聞いてほしいと思います。行政の人とか、総務省の人とか、そういう人の本当の仕事は国民を守ることだと思います。守るためには、国民の話を聞かないと見当違いのことになってしまいます。でも、どなたも聞こうとされません。この電磁界情報センターもそうです。私は、電磁界情報センターの1回目のシンポジウムの時から、同じことをいつも言っていますが、回答はありません。

一人の人間として、やっぱり困っているからわざわざ言っていくわけです。そのわざわざ言ってきた、困った気持ちを余計踏みにじるというのが今の行政のあり方なのです。住民の言うことはくだらないことのようにもかもしれませんが、そこに生きている人間の実情があると思うのです。それを知らうとされなかったら、安全とか環境を守るとか、そういうことは一切できないと思います。

例えば、私の近所にエコキュートですごく困っている人がいます。普通の人には聞こえない音が聞こえる方がいて、夜中もエコキュートの音がして、うるさくてしょうがないということです。私は基地局の撤去運動をしたものですから、電磁波の専門家みたいに思われていて、相談にみえるわけです。それで、電力会社の人に言っても、「これだけの値だから聞こえるはずがない」という、そのような回答しか返ってこない。でも、その方は頭の記憶の何とかが狂っていらっしやって、聞こえるそうです。基地局があったときに、今、基地局がこういう音をしている、ちょっと小さくなった、大きくなったと全部説明してくれた人なのです。

だから、そういう人も世の中にいるということを考えて、エコキュートの置き場を工夫するなどの対応が必要なのではないでしょうか。国民一人ひとりの状況を、全部理解するというのは無理でしょうが、「理解しようとする心がない」

ということを私たちは感じてしまうのだと思います。

もし電磁界情報センターがそのような努力をしていただけるのなら、非常にありがたいと思います。

（ファシリテーター）ありがとうございます。産業界、行政および電磁界情報センターに対してのご意見がありましたので、世森さんからこれに対する回答と、逆に市民や市民団体に求めるもの、先ほど電磁波過敏症の話もありましたが、それ以外で何か一般の市民、電磁界に関心を持ち始めた市民や、あるいは市民団体に対して求めるものがありましたら、まとめて2分くらいでお願いします。

（世森 啓之）実は、電磁界情報センターは、こういうところへ来るといつも同じような叱責をいただいています。もともと去年11月に立ち上げたときに、私個人的にはそのような問題に非常に興味がありました。電磁界の影響かどうかを調べるのは確かに非常に難しいと思うのですが、実際に現場でどういうリスクコミュニケーションが行われているのか、どういうことで苦しんでいらっしゃるのかについて、個人的には調べるべきだと思っています。ただし、それを電磁界情報センターの事業としてやるとなると、マンパワーなどの問題があるので、長い視点での課題として捉えています。それを言うといつも「もっと早くしないと、人が変わってしまう」のようなことを言われてしまいます。

（会場B）そんなことないです、これは行政の問題だと思います。

（世森 啓之）はい、行政もそうだと思いますし、リスクコミュニケーションを担っている電磁界情報センターとしても、そういうことに目を向けていきたいと思います。ご指摘はごもっともだと思いますので、できることとできないことをきちんと明確にした上で、できることは、できるだけ早めにマンパワーなどを投入してやっていくようにしたいと思います。

それを含めて、電磁界情報センターはリスクコミュニケーションをやっているといけなと思っています。それは、単に情報や知識を、それを持っていない人に付与するということだけではなくて、コミュニケーションを通じて、今まさにおっしゃった、市民の知りたいこと、市民が困っていること、市民が言いたいことを我々としても知らないといけなと思っています。今の時点でどういうことが具体的にできるのかはわかりません。こういう場を持つことも一つのやり方だと思いますが、もっと工夫した形でいろいろな場をつくっていききたいと思います。あまり具体的なことを言えませんが、そんな方向で考えて

いきたいと思っています。

また、ステークホルダーの間で議論しないといけないというのは、これはまさに大久保さんをご指摘いただいたとおりで、私は、その一つの形がこの間の経済産業省の電力設備電磁界対策ワーキンググループでの議論かと思います。ただし、この問題は決してあれだけで終わる話ではないと思います。科学は日々進んでいきますので、適切なところで、適切にもう一度議論をやり直すということはあってもしかるべきだと思います。そこは同意します。

その場合、私から市民団体さんあるいは市民の皆さんへの要望なのですが、大久保さんのところはどうかわかりませんが、極端な方だと、例えば電磁界について、「第二のアスベスト、第二の水俣病なのだから、予防原則を適用して規制すべきだ」という主張をされることがよくあります。そうすると、あまりみんなでも議論して、妥協点を見つけるというところになかなか至らないような気がします。そういう意味で、黒に近い灰色だと思っている人と白に近い灰色とと思っている人が議論して、どういう合理的な答えが出るのかなと未だに疑問に思っているのですが、いずれにせよ、皆さんで合理的に議論ができるような場をつくってほしい、あるいはつくっていきたいと思います。

(ファシリテーター) ありがとうございます。時間も押し迫っていますので、本当は今回のディスカッションの論点をもう1回おさらいしたいのですが、それよりは会場の皆さんのご意見を少しでもいただいたほうがいいかと思います。これは言っておきたいという、30秒で言えることがありましたら、会場の方からのご意見をいただきたいと思います。どなたかありませんでしょうか。

(会場C) こんにちは。ただいま会場からの発言で、困っているから役所に相談に行くとか、電磁界情報センターに相談に来るというご発言がありました。その方は本当に困っているから行くのですし、電磁界情報センターなど話を聞く方に是非わかっておいてほしいのは、その方一人だけの問題ではないということです。その方の陰には、潜在的に何十人、何百人の、同じように苦しんでいる人がいるという、そういうことに想像力を持っていただきたいということと、窓口に来ている人がたまたま一人だからといって、その問題をなかったことにしてほしくないということです。

そういうことを続けていかないと、リスクを共有できるとか、リスク認知が同じ視点に立つとか、そういうことは決してあり得ない話だと思います。来ている人が一人だからといって、その人だけを追い返せばいいと、そういう簡単な問題ではないということをちょっと覚悟して当たってほしいと思っています。

（ファシリテーター）ありがとうございました。最後は電磁界情報センターへの激励と受け止めさせていただきたいと思います。

ちょっと締めが悪くて申し訳ございませんが、今回は専門家の皆さまからのご講演で過去を知りました。それから、パネルディスカッションで現状を知りました。現場の経験もお聞かせいただきました。さらに、今後ということで、いろいろなアドバイスも頂戴しました。こういったご意見を踏まえて電磁界情報センターの運営をしていきたいと思いますので、皆さん、これからもご支援のほど、よろしくお願いしたいと思います。

最後はちょっと駆け足になりましたが、これでパネルディスカッションを終了させていただきたいと思います。ありがとうございました。

